

宮城野  
志のぬ  
繪本  
歌討  
白石話

五

13  
3306  
5



へ13  
3306  
5

繪本歌討者女傳卷之八

目録

宮城野歌臺七よき入幸

乙八乃至宮城野か病を女抱とる圖

宮城野花(玉章)と送る圖

宮城野若果を山守奉

楓宮城野か国門を何人圖

廓乃松若餞別乃圖

大正十年八月廿九日寄  
本大學出版部贈

赤橋忠房復舊者と討圖

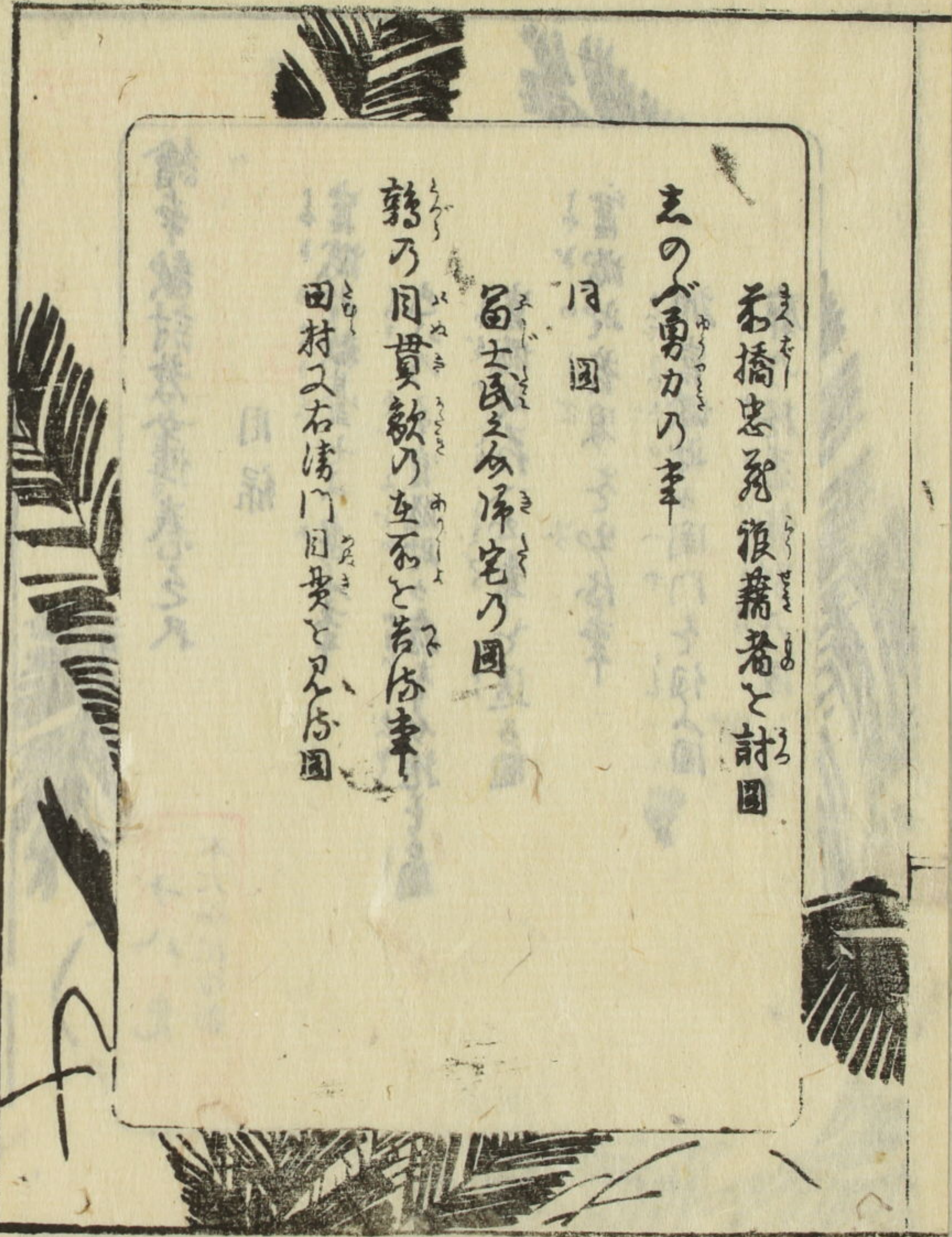
まのへ勇力乃幸

月圓

富士民之夕澤宅乃圖

勢乃目貫款の在ると若侍奉

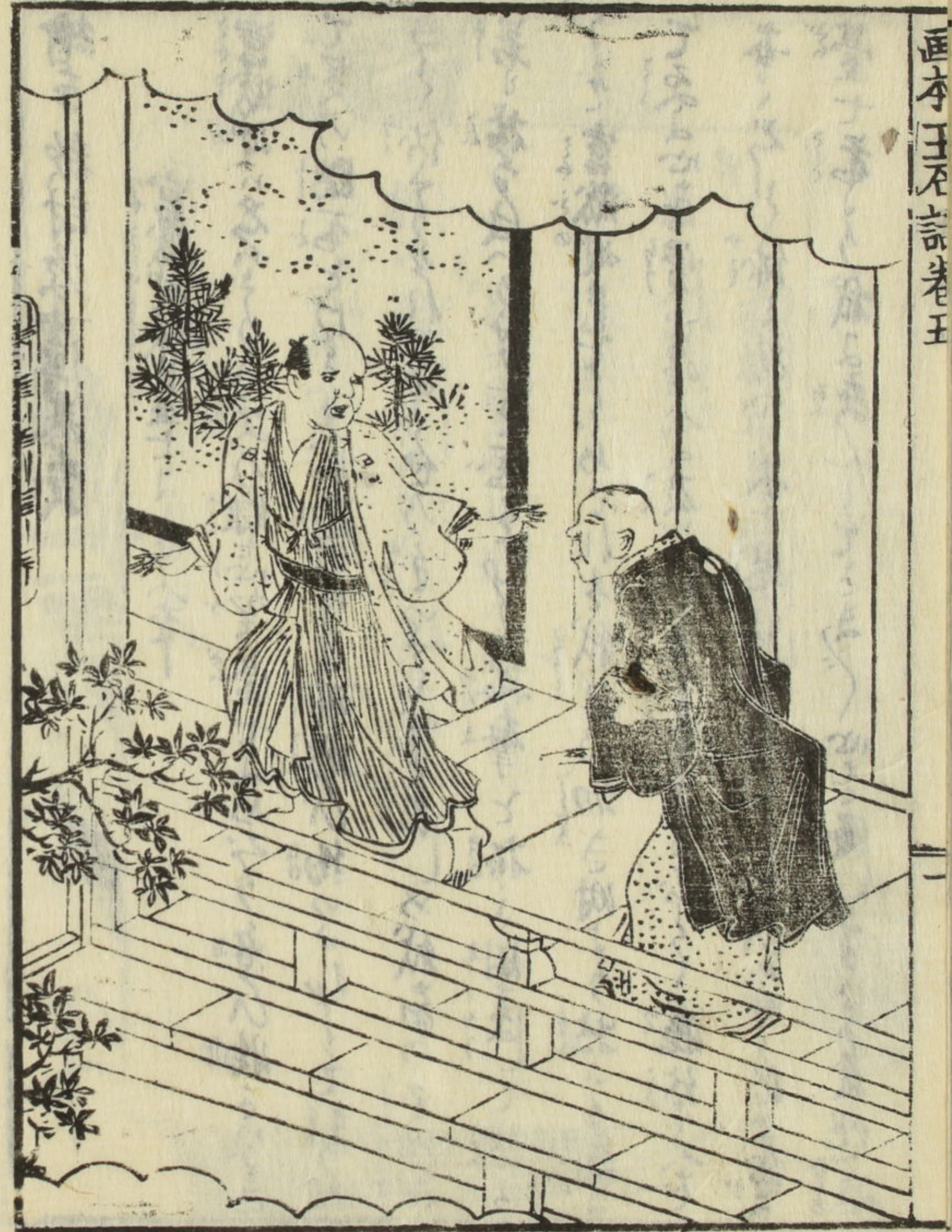
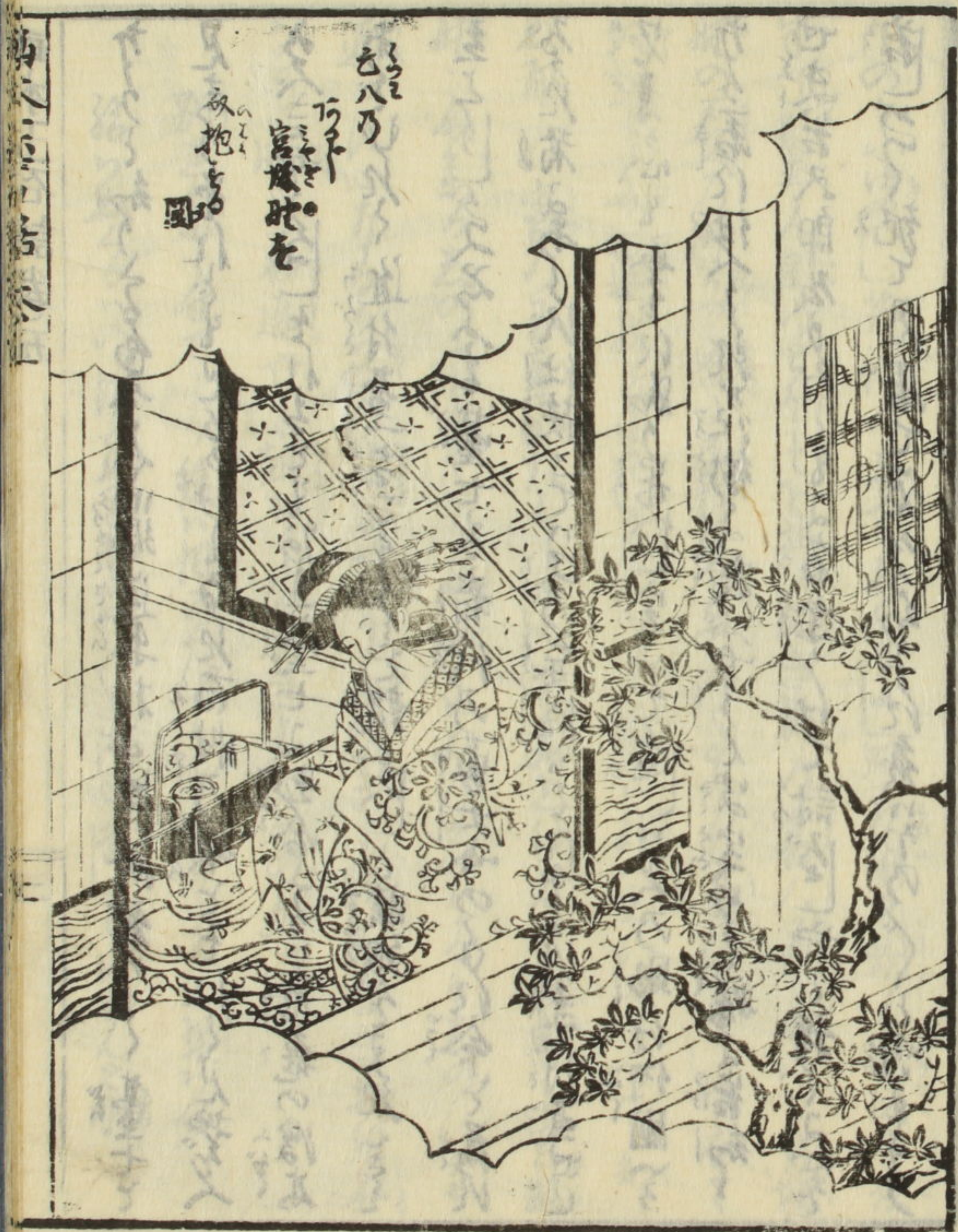
田村又右衛門目貫と又乃圖



繪本款討教女傳卷文

宮城野款其七よ登小奉

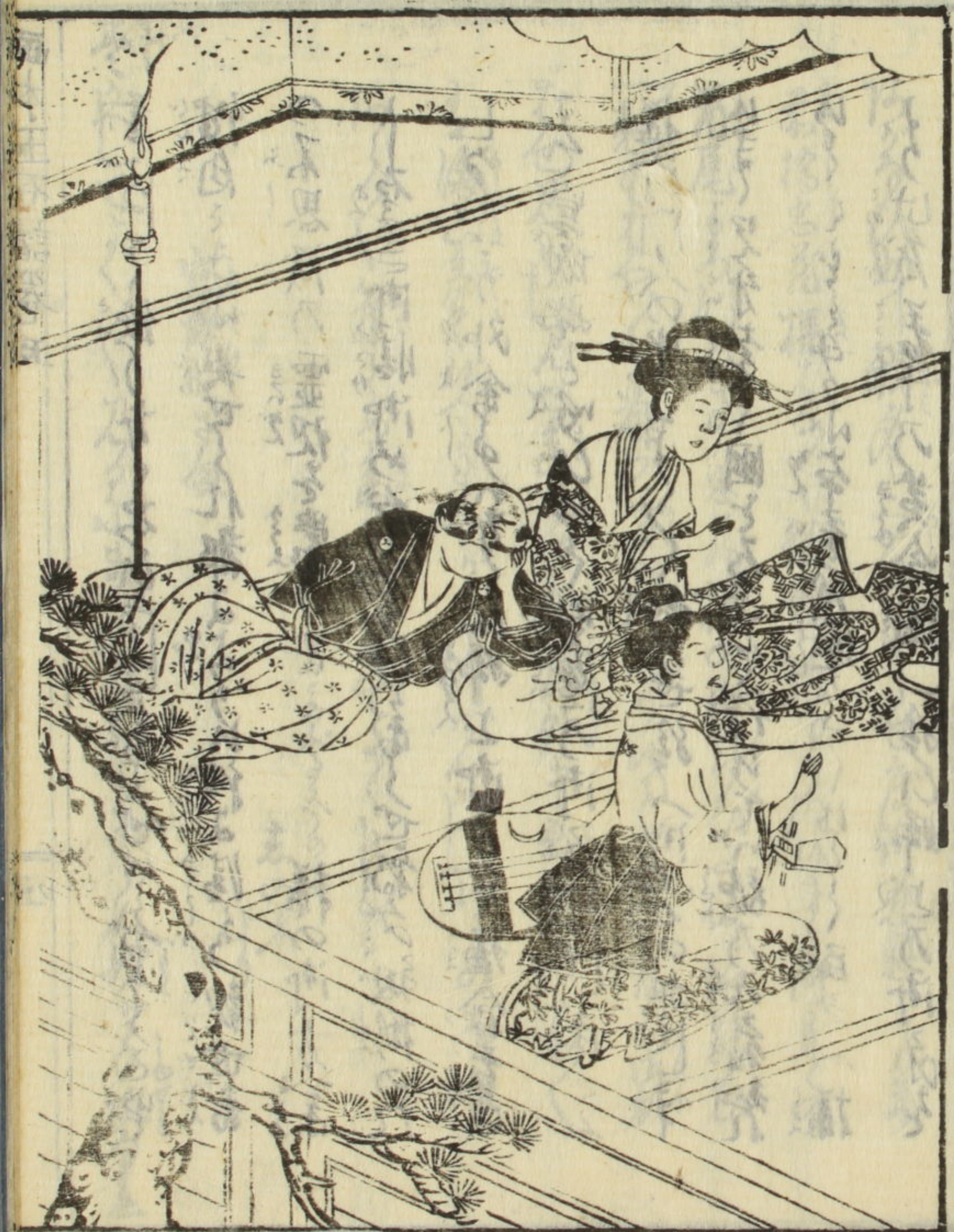
宮城野のいなるよりき又乃難志を其七よめぐるもの物といふこと  
て是乃踏ふとけとまはに困の中は外野の物さしを引け  
きく休よりなれがみせ乃るを心苦しめ我家のいれ  
若し格るはいへせんと医をいへし按摩と振る固まて  
うそ宮城野はとくめこれ我家の乃知き討より持する病  
て又よ心を防し終ふよ及びけおまをさるぶく癒け人を  
あくとりし体は後へ人を退けはくくとあひめがは志望  
其七希より我よあんとてこまぐ心を置しうらひよあは娘



匡平王石言老王

かりりと知りたる由人々四郷送并村は「附載いよく墓七と  
 見たりそれども見らるげもるれ百姓乃娘とそれに見れば  
 むんまやうは「それとも何と墓七と出合ふらり有龜の海本  
 あざしれく道付寄一ちかうくと報と」と懐紙をまら  
 まとけし「又あふま墓七も希代乃勇士女の子に命と為  
 ぐた若くあつた仕換しては乃安統もこれ中へは年月重せし  
 見身が心も夢にぬり案じ「案とて遠」天乃助け何國へ  
 かり若に仕くれば樹とたぶ中へん安定や「姉」若知  
 せま若又即成りらともよ名案うけて討ぶ「やく移く」心を  
 若しつて死て見居て見らるるに夜いのかぐと明まら

かのふば「矢治りもまをんは」て花樹の朝と世間の夜  
 かりと人圍のそとと押岡き都の客人た「ぬ」宮  
 州の若乃御み密は「ゆけ」の所「ゆ」て世ひ「あ」い  
 封せ「ぬ」一通枕とふは「あ」く了「あ」いゆ「あ」い  
 ぬ郡乃宮乃玉妻かた「ゆ」て「あ」とけ「あ」る「あ」る  
 州「あ」る志のよ「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る  
 通「あ」る心「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る  
 州「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る  
 別「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る  
 若「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る「あ」る



画本五石譜卷五

宮城野  
花  
永年と  
送子圖

善くはしく候り方々ありはしき事なせはつらうくこも  
 傾包とまふ小具せしれ都より以後は清く親世音  
 の不思法ノ靈祝を蒙り首  
 様の清方系  
 ト厚ニ清情ゆめごとくけきあり世初々親洲のた  
 しるより外余りかゝる婦と清りゆは鎌倉吉原  
 して宮殿州とひびゆく全盛の清方の日し民々の  
 様清門人の中よりよく知り世終る清方の扱はし  
 いかく足身をく國とるまで候りてい欲のみ私私  
 しくもとも中つ小卒を逐くしてはく民々の様  
 よりけき美手乃美令調(孫の婦と乃清方)を

阿多の物我より一ふあり世度清慈懸くあり  
 和摺忠義様とるぐ鎌倉(清りゆは)いす清りゆの  
 首尾よりゆりゆ忠義様の清方いよまうせ終ひ  
 一魁りたるや都の方(清りゆ)ゆきゆきゆきゆき  
 おせ見し見えきし世度其外や云々系乃るをく  
 と海とまうゆ人ゆきやぐ清りゆはいよのを中  
 阿くく系ゆき系ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

志のふ

宮殿様さぬ

まじしてよくく見らふまがへるくもあゝぬ辨がらひ然るま

を養うとのぞく物さうはしき後をばりのる今都又  
 一人と喰れたるは及をれと後立又活しひつらひ跡が功  
 親又勝まり歌乃を不し何しじり知れつらよはるは  
 が大を逐ぬる種も道はれつらとまにようこひ地ようは  
 と了盤を喰く産後乃こまを何れは批のるの碎やま  
 て後宿の君が膝と地は寝冷ふ都の花まの空際やま  
 異の舟乃君等とこのふちやうらう九献貞して後や  
 らびて押さるるぞ人乃知れと押さるるまて都やま  
 ゆじりしと若る小宮城時よろこび櫛笥の中乃知れま  
 て

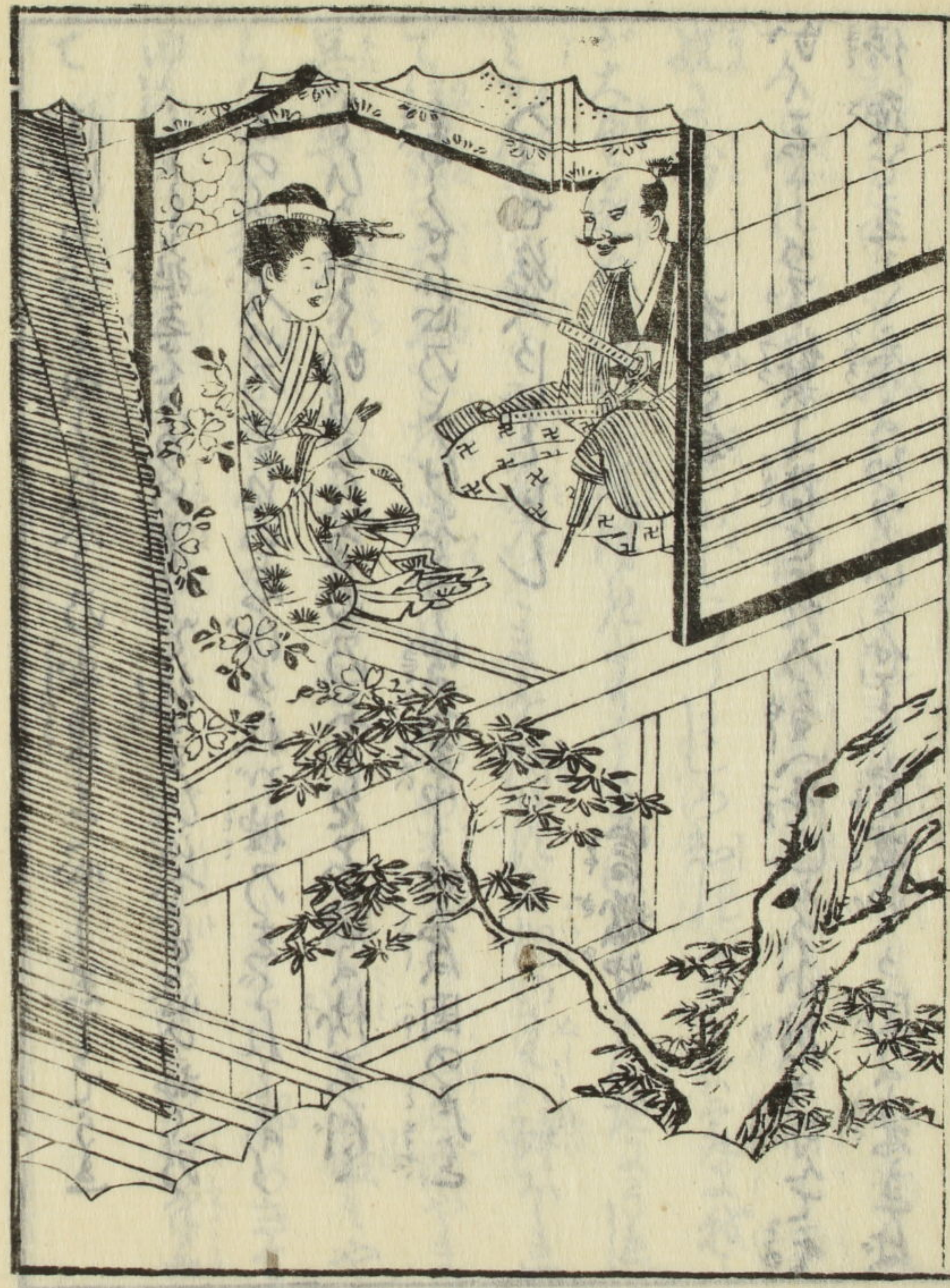
情海た方さぬとは今乃玉妻こそ心うまてうま  
 しく飛立むらりめりどと行まびくとも心の押く乃  
 志のぶふ人乃せれたの志げられが神乃まがれとあ  
 そひのこもつたれなわ乃ふうたあひは休まれ  
 糸のせし心のつげをやは人糸あせ度圃の戸と  
 入らせ給入しとし

宮城時

花さぬ

かく志つらう了盤よ持せ花乃至(巻)くろ小披きんてそ  
 俣種とまてく秀よはらひとせく宮城時う圃の糸まは



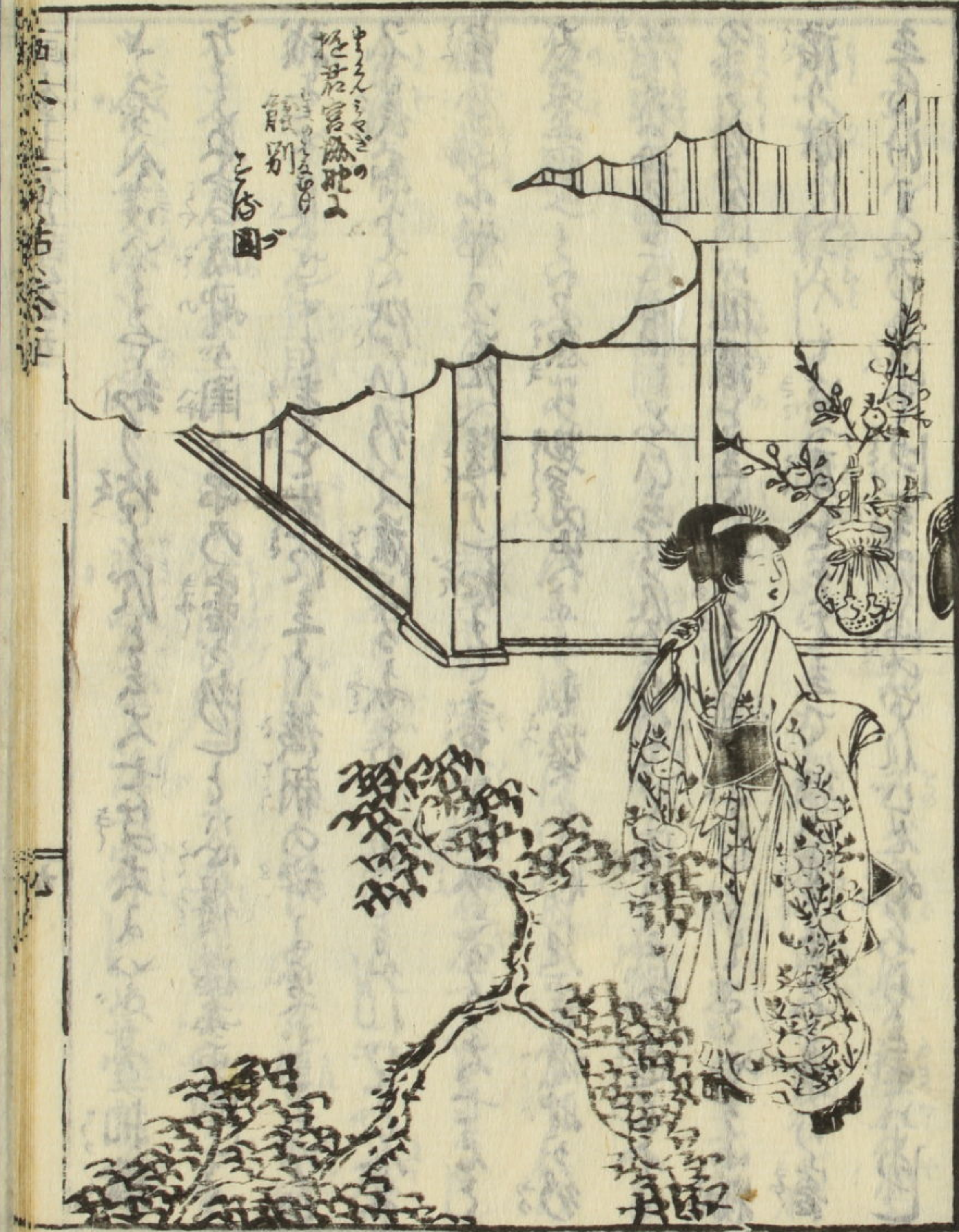


戸の外にむくく出くう道に涙は油もあつた内は泣いて  
てまめやう小物流りて

宮城野若果を知らせ

宮城野が何い見しと遠りた批とつる大龜の白石の志  
志望其七本國と追放せし流浪の身もあがりたる小生得  
強勇あつて秘術兵法の凄きと得たればなかく大國  
の守は仕へるが若くは七と改めあ中の諸士小秘術と指  
南一團の月ひともくく道に月より殿乃所判と世なり鎌倉  
滞留せし小花樹の風流は心を蕩り日夜けをれ通ひ流  
今も囊の内乃黄金も流しくあがり鎌倉と道に出幸國へ

げとくんと計る小宮城野がうけ出さるる乃はをうりて  
殺せよ後継が娘といふにたまはれて一夜乃膝を斬り  
よ幸政唱妓よりくや合め都乃客を欺きて宮城野  
と透るるびと一討乃斗略に今霞ふ嵐が汗はまきしよ  
宮城野が出合さる小津舟にお達しと根りて酒飲して多  
跡さるる目もくく道に月より殿乃所判と世なり鎌倉  
といふと小宮城野や親も見え代ゆかた乃乳を割く人  
たる廣き産後よ只いりりて跡居りてまてとて人と  
あふおき女の毒を立物より六七間より都の客入の付く  
所しや彼毒を言へく今朝は宮城野の若が圍へるを

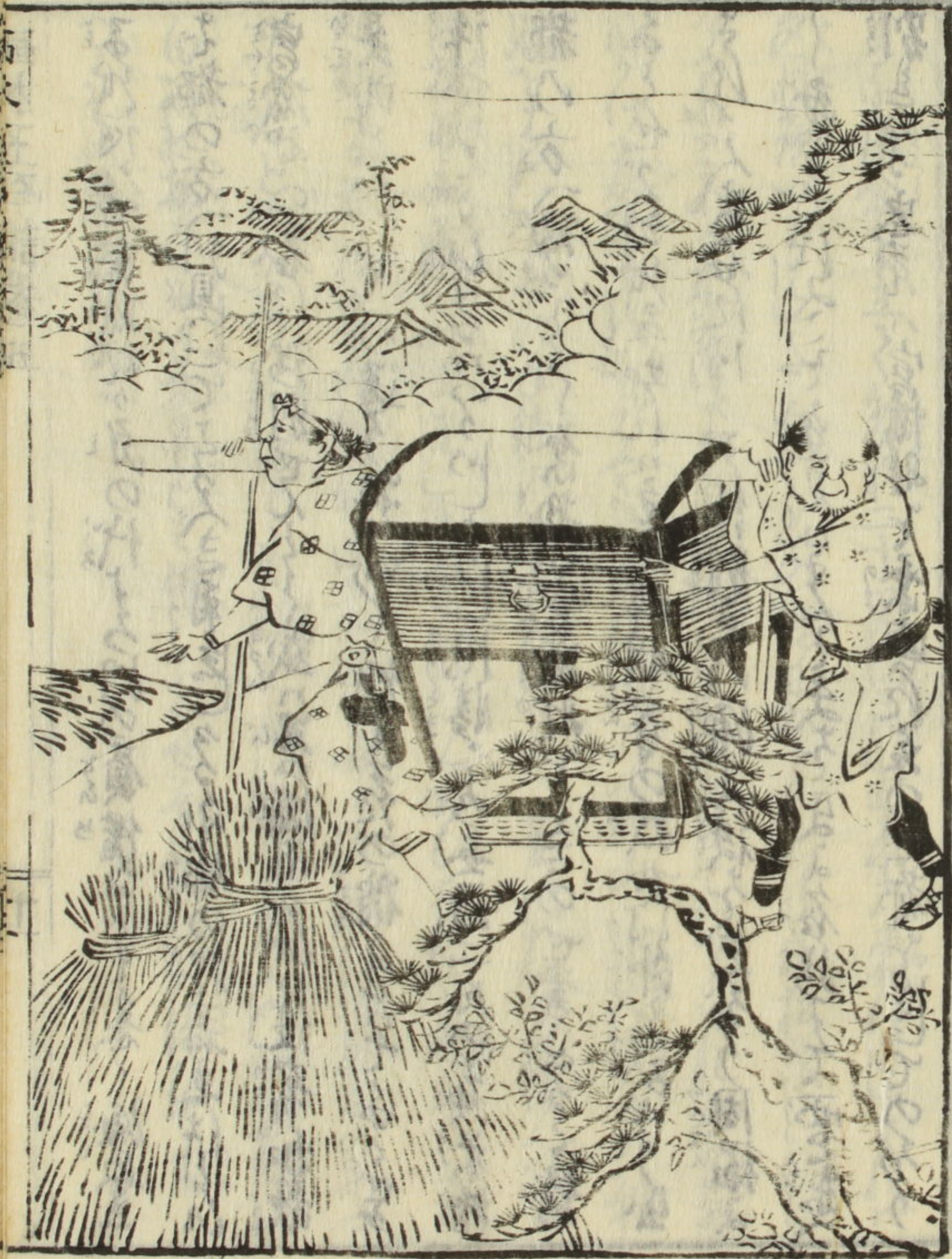


画本玉作話巻五

うつろふ今いふや知り侍らばと云大七はまたいつの相識  
 ありぬ宮城郡が国へ系乃宮が物」とい心得を奉事也しと  
 我をとり具せしと奉事と先ほすく後朝の碑は受れしと云ひ  
 う長前やと物いひゆと落つるあまなりと云て見れがと云  
 宮城郡の都の花（送り）知して書くるあまなり大七は  
 大さふしとら忽ち惣身ゆよりほてははら宮城郡が物  
 流るの物いひ眼と云ひきく及たれと云国乃戸の透るより  
 のどたかたは机張とまき其をいひんふれと云とやふ物  
 流りけりしと云は（耳）とそと云て何ふ中よと云系乃宮  
 云侍けりしと云さ少くはせぬしといひわがこていゆし

うりかんとやがて中へせがみ及出しく己が宿りぬる種倉屋が  
 侍へゆし人して宮城郡がたよりを伺ひ使しと云るまをた  
 り若橋忠茂の宮城郡が物流りしと云て机と入る侍は忠茂  
 是密の謀が本國を宛約の使はは派ちりしと云る  
 後登國とのふりありてつり山と云はははぬきと云るは乃  
 國に怪ふ知りと云若及し基七が宿坊種倉屋へ入るまを  
 余はらうと云り同せされしと云先基七はれまじしやと云  
 知りぞりしと云河國と云明らるるは先によれと云忠茂  
 をと云りしと云三平と云仲國の心きく者よと云るの中へを  
 中倉ら美命と云と云りの鎌倉屋が侍へ宿しと云基七は

敵  
津  
圖  
浪  
藉  
者  
七



むの河にせ言懐世が方の代より川の負借さとも悉く海軍に  
 志都の方へ引具してより大さ相度したる小廓の村表まははひ  
 宮城野の暮れに別見とく或る美酒ありい使者和歌  
 吳曲のいひく送り抱つて他日花の梢よけそとせ  
 誰へともいひたるいさじりし月夜も五月二日の夜若松  
 都の方へゆるとく余物小宮城野とくこのせ言さるる後  
 むとせがめぬ立おれいさ夫婦朋寄の妓女門外さちり出  
 たり人本石にけりされ別見乃懐よ袂を志あり因縁よ  
 く盡してけりよそを意見いえんとまをばよ名あてて西と東  
 別とたる忠義の宮城野と余興のたのせ都とほしてのあり

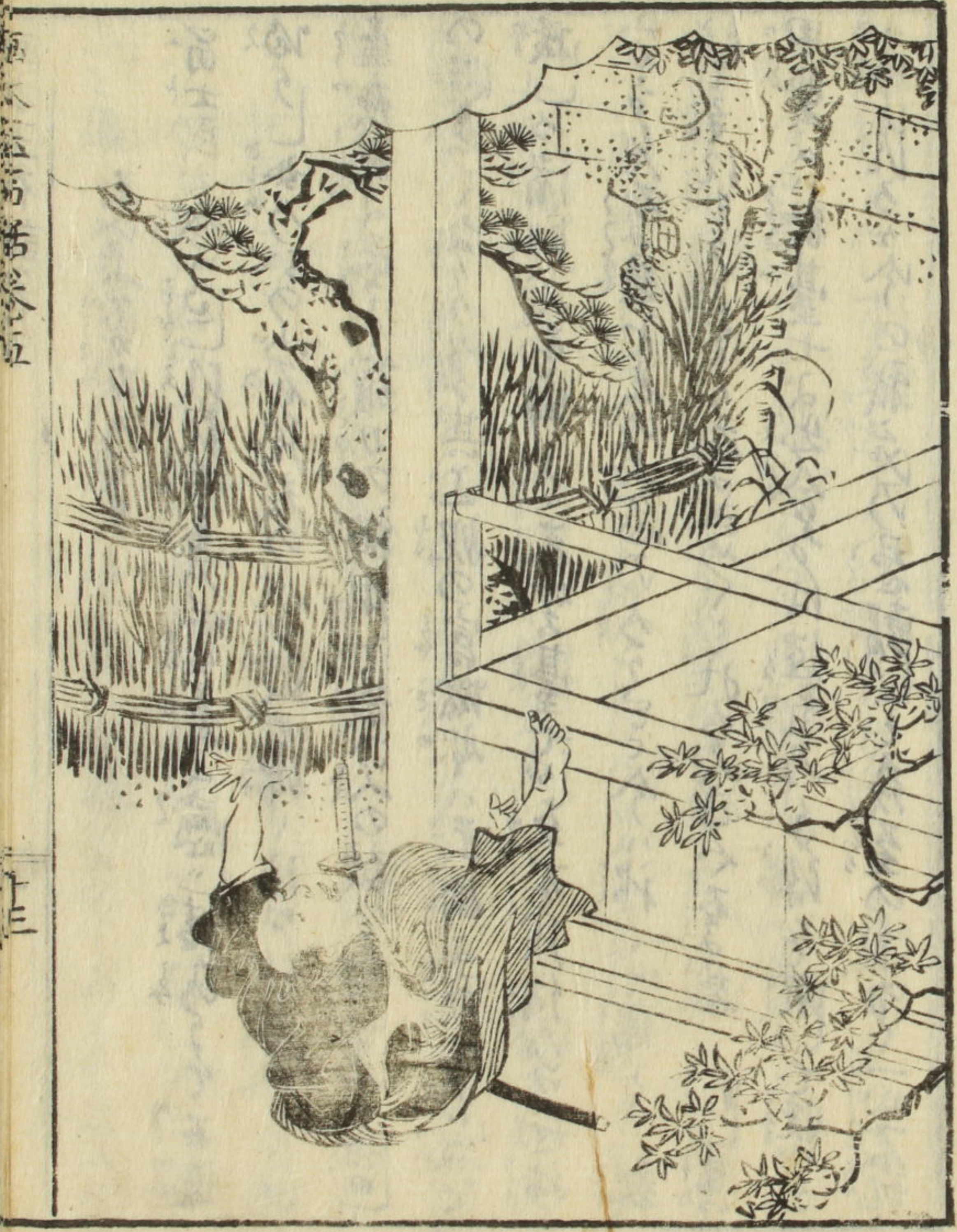
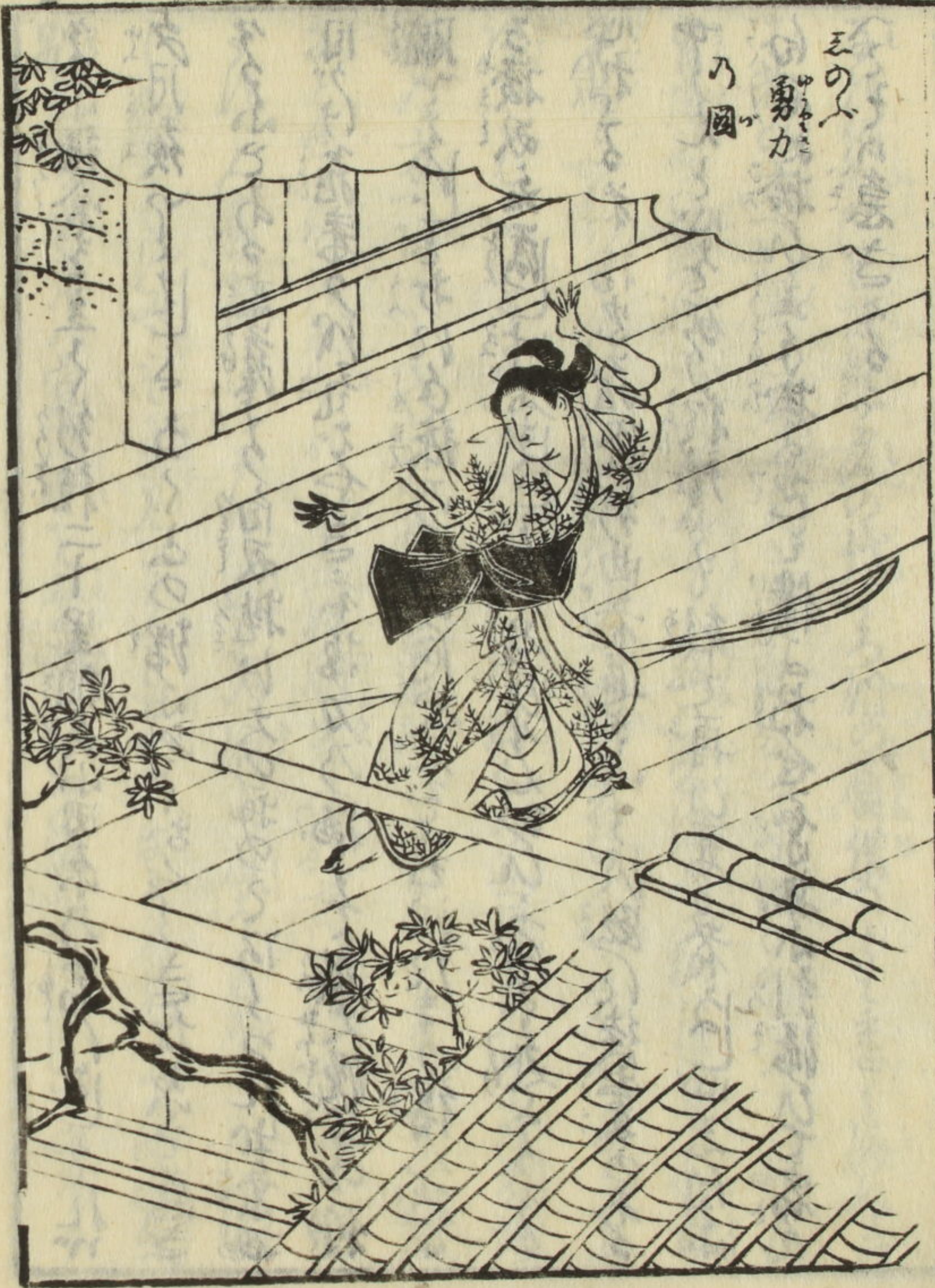


ころ小種倉をまき夕程二十里相見小田原乃宿にほくれい  
 夕月夜よとほくさくこの端ふへかろくき松原と意ぎ  
 ころふとある本藤より白奴抱げ大の物のこけりれ出余抱  
 目がけ飛来りけりきなき本抱刀乃柄を彼大腰子の利  
 腕とまじとおに白珠乃子の用かんそ毛にたまり得お  
 る接奴を海し叶ふはじとやあひかんあひらめく趣さるる  
 心利する茶物忠義近妙曲者返も中うは路に後妻のある  
 中うんと心を破りけ種をも殺て再び来る者は心志白く  
 白奴を捨いさる撫よ色と僕よおせ余抱小引流ひて宿  
 へこそい急ぎたる

画本玉石 講卷五

十一

三のふ  
勇力  
の國

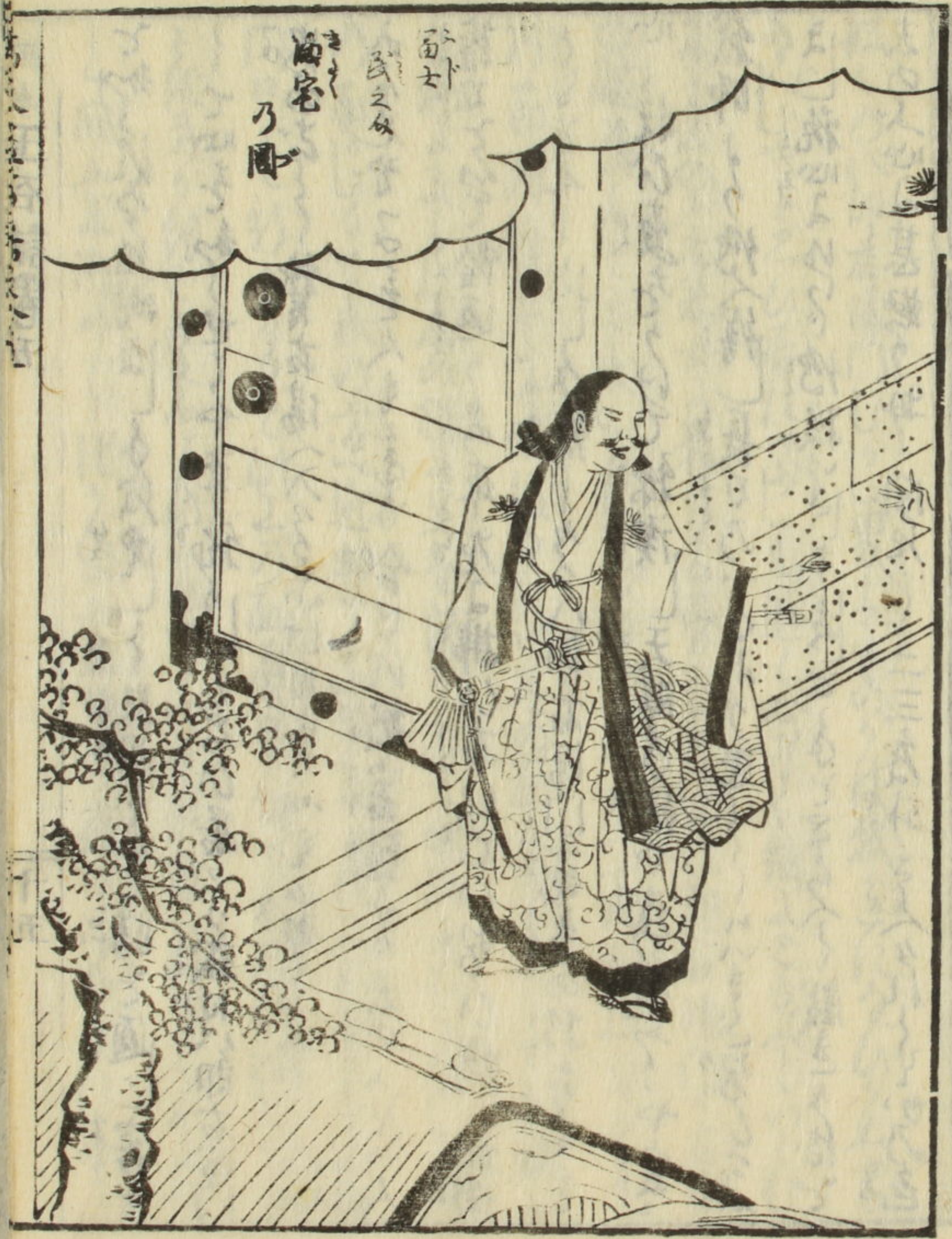


志のふ勇力乃る

富士民之故に也 以親世善乃靈垂及之感 情ありて石連  
 吟し女乃おのふ名を志のふと改め傳くはりれし情とく  
 昼夜慟はるく 蘿刀の秘術と教へ父の敵と討せん 階  
 の階急りなりり其上 此の宮殿也 糸橋よみて若殿と  
 授し 諸國へ人をゆく志 加基七が在石代 何の史せは  
 方より 厚母と志のふが心のめぐり 今に 神と佛と親  
 にして にもくむり 厚きむぐと 此めスきや 厚母うけし 其  
 甲斐の 教基七よ 女をうけ 徒氣乃の 縁を 断して 悦ばせ  
 来り 凡るが 今の 我々の 恩報と 夜星の ちり 一心不亂

の 修飾る 此の 志を 奉むり 此 秘術 かなれども 蘿刀 せめてい やい  
 ういなる 勢之とも 討深と 志き 縁を ちり 哀の 民之めが 門を  
 守り 時ハ 節を 藩門と 志士 けり 威之めが 子三子 余人の 其中  
 此の 英雄 好む乃 たり 其の ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
 の 女を 沈む 人の 妻よ 共 揺成 夫に 此の 教と 知れ  
 自ら ちり 我 勇 鯉を せ おつと まん 又 天下 乃 輝 女と ちり 者  
 誰 ちり び 此 此の 人 忽 志 心 揺 蕩 志 ちり 貞 操 を ちり 人の 心  
 ちり ちり び 子 ちり 乃 ちり 志 此の 在 中 ね 業 平 ちり 我 ちり ちり 他  
 ちり ちり 志 乃 志 の ぶ が 好 て 武 術 と 好 む 心 を 勤 し 回 と 何 の  
 志 と 通 じ ちり ちり 居 ちり ちり 民 之 孝 悌 乃 の ちり ちり ちり 心





と知らばた時はしむるは「と只目をみて情と通じ容を  
 して心を知しせよや幸物し」と名ひ居りて或日八節右衛門  
 出のぶく、独り右場へ入るふけ日暮のみも家へ帰らば  
 のらん子も人もあらず合せに彼容態より志のぶ一人  
 薙刀とて踏返りぬ車たよ拂ひ右にじひ習ひ得し「秘  
 ともとらうしむれく八節右衛門免責の折方りと  
 心は懐ひ憂をうけて秘漢し「天曉ひ珠や武者うや容  
 我師より傳へ得し「長刀乃一ひあり悲しくいままは  
 はし「執心よゆり傳授し「午後」ともとらうて戯き「情を  
 志のぶ心は甚怒り申「因たしく二三度斗さるたれどこの色

奴の八節右衛門むりし男とありは我多にるひうぬ女の  
 あじしやと名ひ居れいし「退く心方く強よとらうてむ  
 りそ志のぶ元来女は希なる勇力なり八節右衛門は右  
 の腕首をとりし「しが引くひく「度屋へ七八間投付たり  
 八節降續きさる雨後るし「庭の面去滑りあて「衣履と  
 る泥よまゝに本の根よ足を強くおて血流さし「はし「こ  
 の死しして表の方へ逃却する小民之女が仇人引つきてさう  
 門はし「そ約合たりそけと乃恥辱せんやうと名ひ礼とら  
 うたまり約を良之女よびとらうて小民を執勢い何ぞとら  
 し「問ふ又御やうはうの女志のぶが薙刀のおもはる

西本玉石譜卷五

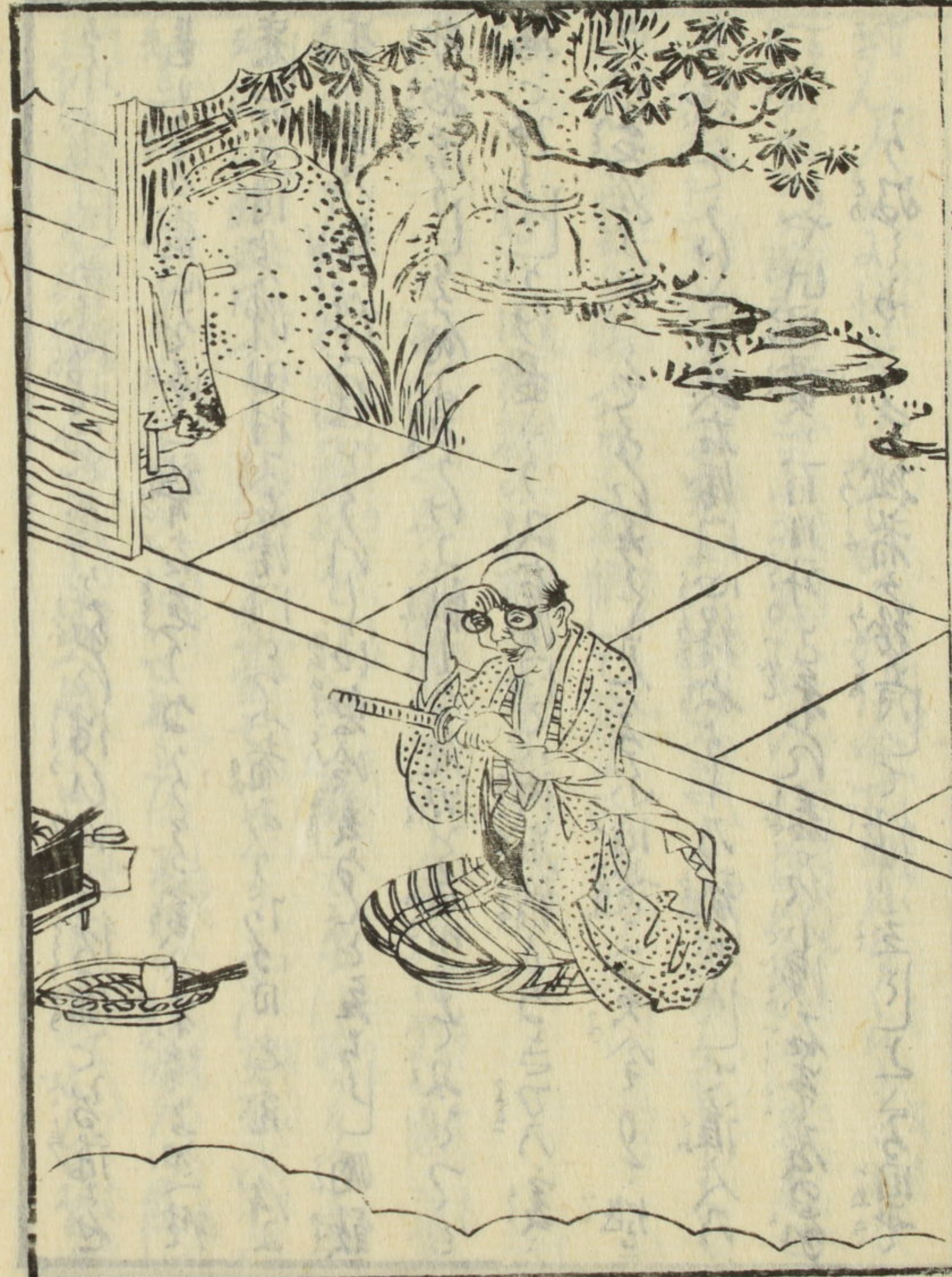
十五

さんぐくは仕まけひてかくは仕合せ面目方くいと云孫く  
走りたるが民之めなきふ折交ひの好き人志のよき意慕せ  
しめ方くん二三子男の情交きま好き方りともまへく  
不美と世なり孫ふく教訓して内よのりぬ

勢乃同貴款の在而を告る事

名 々 留士民之女が心腹の朋方くたれはれは應 遠き  
種會以下向 村女宮殿村を法出 興して意にゆりたる意  
女及び妹志のよきも對面をせ臺せよとらり多しを不いはま  
知るんくも人を付く何いせぬきは不向小住居成は出  
日頃の奉身を遂させてんとはえぬる小住分がよとらひは

ろ小ののほ 宮殿殿の忠義がむねはひゆり後謙とる謙を  
是しより意心を尽 種有古意くうりたる意は兼たか  
速 乃の同貴陣田村又右衛門とら者ありつる日忠義は海  
来 其の難波は冠とらゆり 江魚冷妻るんとえらじ 酒飲  
お抽活りしる耐よ力うけは 齋しる刀と申すてみとつて  
柄を何しうけ是うり又右衛門とい何れ齋りるき刀の安  
うけは是はやとそむね多く見たる小同貴は美令りて能  
る勢をうけり又右衛門心得ぬうり乃親りして誰人乃  
一柄よはやけ目貫い百目拜とるに若くは小湊石市友の家  
中より好くやうりて拙者も務清して能くまじとらる同貴



こそ侍よへいなる方よりありはしと忠亮はて若狭の女  
 頼朝の石室の家士が石室を何と申しや又石室門をく石  
 室の頼朝の石室の御中の御意いませ相識なりはしと  
 氏の家と兼り実なる家ははと申し忠亮膝をくせし  
 け刀子細あり我方は頼朝の御意いませ相識なりはしと  
 不謂あり女は今より侍と稱せは地馬丸方なる石室家の  
 と屋敷の兼り頼朝の家ははと申し忠亮膝をくせし  
 中とよの御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 心安く侍はは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 跡はは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし

倉屋が侍よ侍よはは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 一鎌倉屋よはは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 少とくはは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 長はは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 長はは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 若とくはは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 追く人を是れは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 此はは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 を按くはは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし  
 相おれはは石室の御意いませ相識なりはしと忠亮膝をくせし

今更には法三本より三んで座成三張の労とと休めたり

繪本款討者共傳巻之又終

